

伝え続ける from 3.11 あなたと、生きていく。

あなたと、
生きていく。



防災市民憲章の掲示の前で東日本大震災の教訓を胸に刻む佐々木遥花さん＝釜石市鵜住居町

釜石 発信する側へ踏みだす



景色が変わった今も、被災現場で語り続ける袖谷未生さん＝大槌町新町の旧町役場庁舎跡地

釜石高2年の佐々木遙花さんは3月下旬、首都圏のボランティア団体が関東地方の児童と保護者らを対象に催すオンラインの防災イベントに講師の一人として参加する。防災教育を受けた側から教訓を発信する立場へ、一步踏みだす。

宮古市田老は過去何度も津波災害に襲われ、東日本大震災でも甚大な被害を受けた。宮古観光文化交流協会は震災翌年の2012年から田老地区で「学ぶ防災ガイド」事業を開始。震災遺構を活用し、県内外の人々に教訓を伝えている。

巨大防潮堤の案内や避難路の体験、震災遺構たろう参加し「テレビ越しでなく、観光ホテルで津波襲来時の映像を見せるなど多様なメニューを用意。年間約2万人が訪れている。

20年度は新型コロナウイルス感染症の影響で県外客が激減し7千人台にとどまりましたが、修学旅行や教育旅行の行き先変更をした岩手県内陸部や東北の生徒らが参加し「テレビ越しでなく、



防潮堤の上で犠牲者を悼む遺族や地元住民ら。津波から残った施設が追憶と教訓発信の場となっている=2020年3月11日、宮古市田老

宮 古 遺構活用し「学ぶ防災」

A photograph of a woman with short brown hair, wearing a blue zip-up jacket, standing in front of a modern, multi-story white building. The building features a balcony with a black metal railing and a red metal staircase leading up to it. The Japanese text "たろう観光ホテル" (Taro no Kankou Hotel) is visible on the upper part of the building's facade. The sky is clear and blue.



被災地支援を契機に同町に移住した神谷未生代表理事（名古屋市出身）は「震災を自分のアイデンティティーの一部とすることが伝承につながる。語ることを特別なことにしない方法を探りたい」と意欲的だ。

園内のそれぞれの施設が持つ意味を伝えるガイドを養成するため、同協会は20年12月から計29時間の講座を開講。33人が観光客への応対も含め学んできた。2

出番待つガイド 1期生



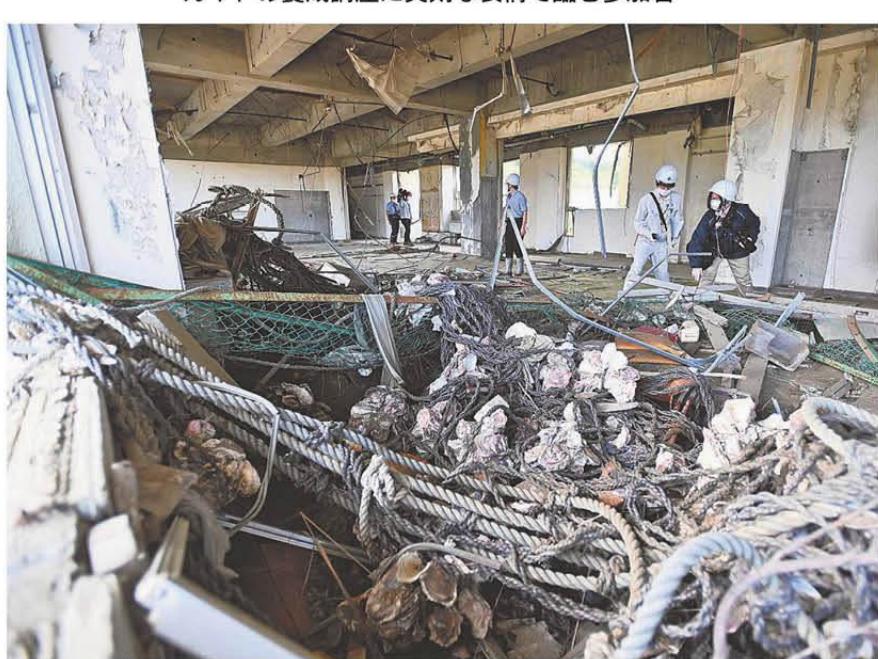
高田松原津波復興祈念公園を案内するパークガイドの養成講座に直剣な表情で臨む参加者

月末に筆記と模擬ガイドの試験を実施。研修を経て春から本格始動する。

受講生の村上容子さん(67)「同市小友町」は津波で当時中学1年のおいを亡くした。「復興祈念公園に震災後、市内の語り部活

行くとおいと一緒にいられるような気がする。ガイドの仕事に不安はあるが、もう多くの人が犠牲になることがないよう自然の怖さを伝えたい」と話す。

同協会の桑久保博夫事務局長は「風化が進む中、観光は同協会観光ガイド部会や個人の語り部が担つてき年から延べ15万人以上を受けるのはその逆も必要になつてくる。経験を伝える専門家としての語り部、公園内の案内に特化したパークガイドと選択肢を増やすこと



東日本大震災の遺構として今年内部公開を
始める旧気仙中校舎＝陸前高田市気仙町

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。